齒根膜腔外齒槽骨中ニ存在スル 「エピテル子ステル」ニ就テ

東京高等齒科醫學校

檜 垣 麟 三

Epithelnester im Alveolarknochen ausserhalb des Periodontiums.

Dr. med. Rinso Higaki,

Professor an der japanischen staatlichen zahnärztlichen Hochschule zu Tokio

(Rektor: Prof. Dr. T. Shmamine.)

〔内 容 抄 録〕

(本編ニ記述スルモノハ Deutsche Monatschrift für Zahnheilkunde 1932, Heft 8ニ載セタル Besondere Befunde von Epithelnestern ausserhalb des Periodontiums ナル論文ト昭和7年10月16日口腔病學會第五回總會ニテ發表シタル「齒根膜腔外齒槽骨中ニ存在スル上皮群ノ運命ニ就テ」ナル論文トヲ綜合シタルモノナリ)。

所謂マラッセ氏上皮群が齒牙附近組織中、特ニ齒根膜腔以外ノ齒槽骨中ニ存在スルコトアルハ從來説ヘラレタル處ナルモ其ノ發現頻度、發現スル原因、其ノ運命等ニ關シテハ未ダ確タル研究ノ發表セラレタルモノアルヲ見ズ。依ツテ余ハ人類顎骨12歳ヨリ64歳ニ至ルモノ19ヲ得テ之ヲ檢索セリ。其ノ齒根膜腔外齒槽骨中ニ見ラル、上皮群ハ齒牙ヲ單位トシテ其ノ頻度ハ85%ニシテ、之ノ存在セザリシ場合ハ未ダ齒牙ノ完成セラレザルモノカ或ハ上顎大白齒ニ限ラレタルカノ感アリ。其ノ存在スル部位ハ血管神經管中ニ82%、齒槽中隔中ニ僅ニ3%ヲ發見セルノミ。斯ク多數ニ發現スル原因ハ主トシテオルバン氏ノ主張スルガ如ク齒牙ノ生理的移動ニ基クモノニシテマラッセ氏ノ主張セル齒堤遺殘物ノ殘存セル場合ハ極メテ稀ナルガ如ク見受ケラル。余ノ檢索ニ依レバマラッセ氏主張ノ場合ヨリモ前掲論文ニ記セル拔齒痕ニ殘存スル場合ノ遙ニ多數ナルヲ發見シタリ。

是等齒槽骨中ニ存在スル上皮群ノ運命ハ次ノ如キニツノ經路ヲ辿ルモノ、如シ。一ツハ上皮群ハ退行變性シ、石灰化シ遂ニハ骨中ニ埋沒シ終ルカ或ハ吸收シ去ラル、カ、他ノ一ツハ上皮群ハ増殖シテ磚狀上皮形トナルカ或ハ亦發生期ノ形態ニ増殖シテ宛モ珞瑯上皮腫ノ如キ形態ヲナシ齒牙腫瘍ノ形成ニ密接ナル關係ヲ有スルモノ、如シ。後者ニ屬スル増殖ノ余ニ依リテ初メテ發見セラレタル2例ノ顎骨ニ就テハ特ニ詳細ナル報告ヲナサントス。

緒 論

余ハ嘗テ口腔病學會ノ前身トモ稱スベキ文部省齒科病院茶話會ノ席上ニ於テ齒髓ノ健全ナル齒牙ニ於テ粘液囊腫ニアラザル、齒根囊腫ノ2例ヲ報告シタルコトアリ。又完全ニ拔去セラレタル拔齒窩ヨリ發生セル2例ノ珙瑯上皮腫ヲ報告シタルコトアリ。當時其等腫瘍ノ由來ニ就キテ多大ノ興味ヲ懷キ、口腔上皮ノ深生、マラッセ上皮群ノ迷入ニ就テ研究スル所アラントセシモ當時ハ僅カノ材料ヲ得タルニ過ギズ、止ムヲ得ズ其ノ儘放棄シ置キタリ。其ノ後余ハ偶々外遊シテヴィーン大學齒科ノゴットリーブ氏ノ研究室ニ學ブ機會ヲ得、同氏ノ多大ノ好意ニ依リテ多クノ材料ヲ附加スルヲ得テ、本研究ヲ兎モ角モ一應ハ完成スルヲ得タル次第ナリ。

齒牙附近組織ニ於ケル上皮群ハ古來人ノ注意ヲ喚起セシモ、之ヲ系統的ニ研究シタルハマラッセ氏ヲ以テ嚆矢トナス。氏ハ齒牙附近組織中ノ上皮群ヲ2種類ニ分類シ、韌帶性上皮細胞群ト齒根附近上皮細胞群ト2種トシ、主トシテ齒齦下組織又ハ齒根膜中ニアリトシ、稀ニハ齒槽骨中ニ上皮細胞群ヲ發見スルコトアリ。氏ニ依レバコハ齒堤殘遺物が骨中ニ迷入シテ出現スルモノナリト説キタリ。

オルバン氏ハ上皮群ノ研究ニ從事シ、齒槽骨血管神經管中ニ屢々發見シテ、之ハ齒牙ノ齒軸方向移動ヲナシタル後ニ上皮群ノミガ其ノ部位ニ殘留スルニ歸因スルモノナリトセリ。而シテオルバン氏ハ其ノ上皮群ハ齒堤ノ殘遺物ニ由來スル場合ヨリモ、珙瑯原基ノ殘遺物ニ由來スル方遙ニ多數ナリト主張シタリ。

余ハ卷頭ニ掲載セル論文中ニ述ベタルガ如ク、齒槽骨中ニ存在スル上皮群ハ拔齒痕ニ由來スルモノアルヲ發見シ、其ノ運命ニ就キテ詳細ナル報告ヲナセリ。

以上述ベタル外ラルトシュナイデル氏、ノイベルグ氏等ノ上皮群ノ研究ノ發表アルモ、前者ハ組織學研究ニ基礎ナキ文獻ノ蒐集ニ止リ、亦後者ハ發生學的研究ニ過ギズ。

依ツテ余ハ比較的多數ノ材料ヲ得タルヲ以テ、齒根膜腔以外齒槽骨中ニ存在スル上皮群ノ頻度、其ノ由來、態度等ニ就キテ出來得ル限りノ檢索ヲ試ミントシタリ。

研究材料並ニ方法

材料ハヴィーン市立病院病理研究室ヨリ得タル顎骨19ニシテ12歳ヨリ64歳ニ至ル年齡ノ者ナリ。死體ハ總テ病理解剖ニ附セラレテ死因ヲ確定シタルモノ、中、主トシテ癌腫、肉腫ノ如キ惡性腫瘍ヲ有シタルモノハ出來得ル限り避ケ、主トシテ急性疾患ニシテ永ク病臥セザリシモノヲ選擇セリ。檢査顎骨總數ハ19ニシテ之ヲ齒牙ノ數ヨリ云フ時ハ331齒ニ涉レリ。材料ハ定法ニヨリテ脱灰シ「ツェルロイゲン」包埋標本トシ、總テ2乃至3齒ノ小片トシ、遠近心的連續標本ヲ作製シタリ。染色ハ主トシテ

「ヘマトキシリンエオジン」染色ニシテ必要ニ應ジテヴァンギーソン法、ヴィルショフスキー法等ヲ併用セリ。

検索成績

齒根膜腔外齒槽骨中上皮群出現頻度ハ次ノ如シ。

検査顎骨總數	19
検査齒牙總數	331 齒
血管神経管ヲ發見シタル數	119 齒(60%)
a 其ノ中上皮群ヲ發見シタル齒牙數	163 齒(82%)
b 其ノ中上皮群ヲ發見セザリシ齒牙數	36 齒(18%)
齒槽中隔ニ上皮群ヲ發見シタル齒牙數	11 齒(3%)
拔齒痕總數	31 箇所
a 其ノ中上皮群ヲ發見シタル數	14(45%)
b 其ノ中上皮群ヲ發見セザリシ數	17(55%)

之ヲ出現部位ニヨリテ觀察スル時ハ血管神経管中ニ最も多く、拔齒痕中之ニ次ギ、齒槽中隔中ニ最も少シ。

更ラニ血管神経管中ニ上皮群ヲ發見セザリシモノヲ精細ニ述ベンニ、19歳ノ顎骨ニ於テ1齒、24歳4齒、29歳1齒、36歳1齒、40歳3齒、47歳2齒、47歳6齒、49歳7齒、58歳5齒、年齢不詳4齒、年齢不詳2齒、合計36齒ニシテ、之ヲ齒牙ノ部位ニヨリテ檢スレバ36齒中27齒ハ上顎大白齒ニシテ、他ノ部位ニ於テハ僅カニ9齒ニ過ギザリキ。

次ニ齒槽骨中ニ存在セシ上皮群ノ狀態ヲ檢索センニ、之ヲ各存在部位ニ分類シテ述ブレバ次ノ如シ。

血管神経管中ニ上皮群ヲ發見セルモノ	163 齒ニ於テ
正常狀態ノモノ	134 齒(82%)
石灰化セルヲ認メタルモノ	8 齒(5%)
増殖セルヲ認メタルモノ	21 齒(13%)
a) 磚狀上皮型	12 齒(7%)
b) 瑱瑱上皮腫型	9 齒(6%)
齒槽中隔中ニ上皮群ヲ發見シタルモノ	11 齒ニ於テ
正常狀態ノモノ	7 齒(64%)
石灰化セルヲ認メタルモノ	1 齒(9%)

増殖セルヲ認メタルモノ 3 齒 (27%)

a) 磚狀上皮型 0 (0%)

b) 珪瑯上皮腫型 3 (27%)

齒槽中隔中ニ上皮群ヲ發見シタル齒牙ヲ年齡別ニ詳記スレバ、29 歳ノ顎骨ニ 4 齒、年齡不明ナルモ若キ顎骨ニ 1 齒、40 歳ノ顎骨ニ 3 齒、55 歳ノ顎骨ニ 3 齒ヲ發見セリ。

拔齒痕中上皮群ヲ發見セルモノ 14 箇所中ニ於テ

正常狀態ノモノ 4 (28%)

石灰化セルヲ認メタルモノ 5 (36%)

増殖セルヲ認メタルモノ 5 (36%)

a) 磚狀上皮型 5 (36%)

b) 珪瑯上皮腫型 0 (0%)

ヲ示セリ。

更ラニ齒槽骨中ニ存在シ増殖セル上皮群中珪瑯上皮型ヲ示セルモノハ、40 歳ノ顎骨ニ 7 齒、49 歳ノ顎骨ニ於テ 5 齒ヲ認メ、其ノ他ニ於テハ發見スルヲ得ザリキ。

前述ノ如ク齒根膜腔外ニ於テ齒槽骨中上皮群ノ出現スルハ年齡ニ正比例スルモノノ如シ。即チ齒根膜中ノ上皮群ハ年齡ト反比例シ若年者ニ於テ明瞭ニ出現シ、漸次老年トナルニ從ヒテ不明瞭トナルニ反シ、齒槽骨中ニ出現スル上皮群ハ若年者ニ於テハ殆ンド見ルヲ得ザルモ、老年者ニ於テ殆ンド例外ナク認ムルヲ得ベシ。コハ主トシテ齒根端ニ至ル血管神經管中ニ存在スルカ、若シクハ此ノ附近骨中ニ存在スルモノナリ。之ヲ以テ見ルモ齒槽骨中ニ現ハル、上皮群ノ大部分ハ齒牙ノ移動ニヨリテ、以前齒根膜中ニ存在セルモノガ、骨中ニ殘留セリト認ムルガ最モ至當ナルガ如シ。齒槽中隔中ニ殘存セシ上皮群中、齒堤ノ殘遺物ト見做シ得ルモノナキニシモアラザルモ、其ノ出現率ニ至リテハ之ヲ全部齒堤殘遺物ト見做スモ尙且ツ 3%ノ低率ヲ示スニ過ギズ。余ノ齒堤殘遺物ノ運命ヲ組織學的檢索シタル成績ニ依レバ齒牙形成完成直後マデハ齒槽骨上ニ散在セルヲ認ムルモノ稍々年ヲ經タルモノニ於テハ多クハ消失スルモノ、如ク、精細ナル檢索モ徒勞ニ終ルノ止ムナキニ至リタリ。

次ニ余ハ齒槽骨中上皮群ノ存在率ト其ノ顎骨ノ生體ノ有シタリシ疾患トノ間ニ何等カノ特種性アリヤ否ヤヲ檢シタリ。即チ癌腫、肉腫等ノ如キ新生物ヲ有シタルモノハ上皮群ノ存在率高ク且ツ増殖ノ傾向ヲ示スガ如キコトナキヤ否ヤヲ主トシテ檢シタルナリ。然ルニ病理解剖的診斷ト對照セルモ何等ノ特種性ヲ認ムル能ハザリキ。

齒槽骨中ノ上皮群ノ出現ハ年齡ニ依リテ差異アリ。一般的ニ云ヘバ齒根膜腔外齒槽

骨中ニ上皮群ヲ認ムルハ概略 15 歳以上ノ顎骨ナリトス。15 歳以上 25 歳位迄所謂青年期ノ顎骨ニ於テハ齒根膜中ノ上皮群ハ極メテ明瞭ニシテ、血管神経管中ニテハ入口若シクハ極メテ淺ク存在シ、余ノ例ニ於テハ齒槽中隔中ニハ認ムル能ハザリキ。然カモ其等上皮群ハ殆ンド正常ノ形態ヲ示シタリ。然ルニ年齢 30 歳以上即チ壯年期以上ノ顎骨ニ於テハ、齒根膜中ノ上皮群ハ比較的小トナリ、前者ニ比シテ明瞭ナラズ。血管神経管中ニハ深ク存在シ時ニハ數「ミリメートル」ニ及ブコトアリ、又此ノ時期ニ於テハ齒槽中隔中ニ認メラル、コトアリ、然カモ其ノ上皮群ハ殆ンド總テ多少ノ變化ヲ示セリ。

上顎竝ニ下顎ニ於テハ上皮群ノ出現ニ差異アリ。下顎ニ於テハ殆ンド例外ナク之ヲ發見スレドモ、上顎ニ於テハ大白齒部ニ於テハ殆ンド發見セズ。コハ上顎竇底ガ常ニ齒根端附近ニ接近シ居ルタメニ下顎ニ見ルガ如キ著明ナル血管神経管ヲ見ルヲ得ザルガ故ナリ。故ニ之ヲ齒牙ノ部位ヨリ論ズレバ前齒部及ビ小白齒部ニ於テハ殆ンド上皮群ヲ見ルモ、大白齒部ニ於テハ下顎ニ於テハ常ニ出現スルモ上顎ニ於テハ殆ンド出現スルコトナシ。

然カモ上皮群ガ齒槽骨中ニ存在スル場合ノ特種ノ所見ハ常ニ神経纖維束ヲ伴フコトナリトス。故ニ此ノ上皮群ヲ檢索セントスルニ當リテハ齒槽骨中神经纖維束ノ走レル部分ヲ綿密ニ檢索スレバ足レリ。但シ之ガ甚シキ退行變性ヲ示セル場合兩者ノ關係著明ナラザルコトアリ、注意ヲ要ス。

齒根膜腔外齒槽骨中ニ在ル上皮群ハ血管神経管中ニ存在スルモノニアリテハ 18%, 齒槽中隔中ニ存在スルモノニアリテハ約 36%, 拔齒痕ニ於テハ 72% ハ其ノ形態ノ變化ヲ示シタルハ上述ノ如シ。故ニ其ノ變化ノ最モ甚シキハ拔齒痕ニアルモノニシテ、齒槽骨中ニ存在スルモノ之ニ次ギ、血管神経管中ニ存在セルモノ最モ其ノ變化少シ。此ノ形態ノ變化ノ出現スル時期ハ、中年以前ハ變化少ク、主トシテ中年以後ニ出現スルヲ普通トス。

其ノ出現スル變化ハ第一ハ石灰化ニシテ、即チ「セメンチケル」ヲ形成スルニアリ。此ノ場合正常上皮片ガ退行變性シテ遂ニ石灰化シ、時ニハ周圍ニ結締組織ガ取り圍ミテ共ニ化灰スルコトアリ、或ハ又造白堊質細胞ガ出現シテ石灰化ヲ増大スルコトアリ。或ハ又一旦磚狀上皮型ニ増殖シタルモノガ前者ト等シク石灰化スルコトアリ。

第二ニ見ラル、變化ハ増殖ナリ。其ノ増殖ニ二ツノ特異ナル形態ヲ示ス。其ノ一ツハ磚狀上皮型ニシテ口腔上皮即チ珐瑯上皮ノ母體細胞ニ還元スル形ナリ。余ハ之ヲ靜止形ト呼ブ。殊ニ此ノ形態ノモノガ甚シク増殖ヲ來ス時ハ宛モ上皮眞珠ノ如ク、中央

部ハ時ニ角化スルコトアリ又石灰化スルコトアリ或ハ亦内部ヨリ囊腫變性ヲ來スコトモ可能ナルベク、恐ラク齒牙囊腫形成ニ最モ意義ヲ有スルモノナルベシ。其ノ二ニハ珐瑯上皮腫様増殖ナリ、即チ珐瑯原基換言スレバ發生期珐瑯上皮細胞ニ還元ス。余ハ之ヲ活動形ト呼ブ。此ノ者ハ恐ラク珐瑯上皮腫或ハ齒牙腫ノ形成ニ密接ナル關係ヲ有スルモノナルベシ。

余ハ檢索中 2 個ノ顎骨ニ於テ後者ニ屬スル特種ノ形態ノ變化ヲ示セルモノヲ發見シタルヲ以テ之ヲ詳記セン。

第 1 例。40 歳ノ顎骨。肉眼的檢査ニ於テハ何等特種ノ變化ヲ發見セズ。拔齒窩ハ硬固ニ治癒セリ。顯微鏡の檢査ニ於テハ次ノ如キ變化ヲ發見セリ。

		AS							A		A						
8	7	5	4	3	2	1		1	2	3			5		7		
8		5	4	3	2	1		1	2	3			4	5			
		AS AS												A A			

即チ 23 齒中 13 齒ニ於テ齒槽骨中ニ上皮群ヲ發見ス。即チ 10 齒ニ於テハ血管神經管中ニ、3 齒ニ於テハ齒槽中隔中ナリ。其ノ中 7 齒ニ於テハ上皮群が發生期ノ形態即チ珐瑯上皮腫様増殖ヲ示セリ。齒式ニ於テ A ト記セルハ珐瑯上皮腫様増殖ノ血管神經管中ニ存在スルヲ示シ、AS ハ之ガ齒槽中隔中ニ存在スルヲ示ス。即チ此ノ増殖ハ上顎ノミナラズ下顎ニモ、右側ノミナラズ左側ニモ多發性分散的ニ發見セラレタリ。

第一圖、第二圖、第三圖、第四圖ハ此ノ顎骨ノ 5 及ビ 4 間ヲ示ス。正常形態ノ上皮群ニ接シテ増殖セル上皮群ヲ見ル。第二圖ハ磚狀上皮形ノ増殖アルヲ示ス。第三圖及ビ第四圖ハ同一部位ノ相異リタル平面ヲ示シタルモノナリ。第三圖ハ多クノ上皮群ヲ示ス。此ノ中 3 個ノ強度ニ増殖セルモノト之ニ隣レル正常ニ近キ 3 個ノ上皮群アリ。3 個ノ強度ニ増殖セルモノ (a, b, c) ニ於テハ周圍ニ空隙ヲ有シ、之ニ珐瑯質形成時或ハ珐瑯上皮腫ニ於テ見ルガ如キ車軸狀區分ヲ示セリ。

第五圖及ビ第六圖ハ同一顎骨ノ 5 及ビ 4 間ノ像ヲ示ス。此ノ上皮群モ亦珐瑯上皮腫様性質ヲ示ス。中心ニ於テハ上皮細胞ハ珐瑯髓ノ形態ニ近ク、周邊ニ於テハ立方形乃至圓壘形細胞出現セリ。

第七圖及ビ第八圖ハ 5 及ビ 6 間ノ齒槽中隔ヲ示ス。明瞭ナル圓壘形ヲ見ル、細胞群周邊ニハ著明ノ空隙アリテ且ツ車軸狀區分ヲ示セリ。

第九圖及ビ第十圖ハ 2 ノ血管神經管ノ像ヲ示ス。増殖セル上皮群ハ齒根端ヨリ遙ニ離レタル部分ニアリテ、珐瑯上皮腫様像ヲ現ハス。

第十一圖及ビ第十二圖ハ 1 ノ血管神經管ヲ示ス。第九圖及ビ第十圖ニモマシテ、齒根端ヨリ離レタル部分ニ於テ上皮群が存在シ且ツ珐瑯上皮腫様増殖ヲ現ス。

第2例。49歳ノ顎骨。胃潰瘍ニテ死亡ス。組織學的檢索ニ於テ次ノ如キ變化ヲ發見セリ。

			5	4	3	2	1		A	1	2	3	4	5	
7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	7		
				A	A							A	A		

23 齒中 15 齒ニ於テ齒槽骨中上皮群ヲ發見シ、其ノ中齒式ニ於テAト記シアル5齒ニ於テハ血管神經管中ニ珙瑯上皮腫様増殖ヲ發見セリ。本例ニ於テハ上下顎左右側ノ別ナク珙瑯上皮腫様増殖ヲ來シ居レリ。

第十三圖、第十四圖、第十五圖ハ「4」ノ血管神經管ヲ示ス。第十四圖及ビ第十五圖ニ於テ珙瑯上皮腫様像ヲ見、周邊ニ於テハ定型の圓壻形細胞層ヲ示シ、中心ニ於テハ星芒狀網ヲナシ且ツ囊腫變性ヲ示セルヲ見ル。

吾人ハ此ノ2個ノ顎骨ニ於テ多クノ場所ニ互ニ無關係ニ珙瑯上皮腫様増殖ヲ有スル上皮群ヲ見ル。此ノ上下顎左右兩側ニ無關係ニ多發性ニ分散シテ種々ノ部位ニ存在スルノ事實ハ全身のニ原因ノ存スルモノト云ハザルヲ得ズ。此ハ上皮ノ先天の性質ナリヤ或ハ亦生活中新陳代謝ニ依リテ全身ニ生ゼル傾向ガ此ノ變化ヲ生ゼシムルニ至レルヤハ明ニセラレザルベカラザル問題ナリ。此ノ變化ノ多發性ナルノ事實ノミヨリ論ズレバ珙瑯上皮腫性體質ト稱スルモノヲ肯定スルヲ至當トスルガ如シ。

結 論

1. 齒根膜腔外齒槽骨中ニハ極メテ多數ニ於テ上皮群ノ存在スルヲ見ル。其ノ出現部位ハ大多數ハ血管神經管ニシテ、拔齒痕ニ於テ僅カニ、齒槽中隔ニ於テハ極メテ稀ニ見ラル、ニ過ギズ。
2. 出現率ハ疾患ニ依リテ何等ノ特種性ハ示サバルガ如シ。
3. 上皮群ノ血管神經管中ニ於ケル位置ハ青年期ニ於テ淺ク、漸次年齡ニ比例シテ其ノ深部ニ存在スルニ至ル。
4. 上顎大白齒部ニ於テハ上顎竇底ニ近接セル關係上齒槽骨中ニ上皮群ノ存在スルコト稀ナリ。
5. 上皮群ノ存在スル所必ズ神經纖維束ノ存在アリ。此ノ兩者ノ關係ハ不可分ナルガ如シ。
6. 上皮群ノ齒槽骨中ニ出現スル原因ハ齒牙ノ移動ニヨリテ齒根膜中ノ上皮群ガ齒槽骨中ニ殘留スルニ至ル場合最モ多ク、次デ拔齒ニヨリ齒槽骨中ニ上皮群ノ殘留スル場合ニシテ、發生期中ノ齒堤ノ齒槽骨中ニ殘留セル場合ハ極メテ稀ナルガ如シ。
7. 上皮群ハ青年期ニ於テハ殆ンド正常ノ形態ヲ示スモ、年齡ヲ増スニ從ヒ必ズ多

少ノ變化ヲ示スモノトス。

8. 上皮群ノ變化ニ2型アリ。一ツハ石灰化ニシテ他ノ一ツハ増殖ナリ。

9. 上皮群ノ増殖ヲ示ス場合ニ更ラニ2型アリ。一ツハ磚狀上皮形ニシテ他ノ一ツハ珐瑯上皮腫形ナリ。是等ノ上皮群ノ増殖ハ齒牙腫瘍殊ニ囊腫、珐瑯上皮腫ノ形成ト密接ナル關係ヲ有スルモノ、如シ。

10. 此ノ2型ノ増殖ハ如何ニシテ起ルヤハ全ク不明ナルモ、珐瑯上皮腫形増殖ハ斯ル體質ノ存スルモノニアラズヤヲ思ハシムルモノアリ。

本稿ヲ撰筆スルニ當リ遙ニゴットリープ教授並ニオルバン學士ニ感謝ノ意ヲ表ス。

文 獻

- 1) Euler, H., u Meyer, W., Pathologie der Zähne. 1927. 2) Kronfeld, R., Adamantinoma. J. A. D. A. 1930. 3) Lartschneider, J., Die sogenannten Malassezschen paradentären Epithelnester und ihre histologische und pathologische Bedeutung. Z. f. Stom. 1929, H. 5. 4) Malassez-Galippe, Les debris épithéliaux paradentaires. 1910. 5) Mummery, I. H., Studies in dental histology. The sheeth of Hertwig and the epithelial debris. 1921, Dent. Cosmos, No. 11-12. 6) Orban, B., Dental histology and embryology. 1929. 7) Orban, B., Einige besondere Epithelbefunde. S. M. S. f. Zahnheilk. 1926, H. 7. 8) Siegmund, H., Pathologische Histologie. Fortschr. Zahnheilk. 1929, L. 4. 9) Siegmund, H., Demonstration zur pathologischen Histologie der Adamantinome. Parodontium 1929, Nr. 1. 10) Stein G., u. Weinmann, J., Die physiologische Wanderung der Zähne. Z. f. Stom. 1922, H. 10. 11) Thomas, N. G., J. A. D. A. 1925, No. 3. 12) Pflüger, H., Zur Entstehung der Schmelzperlen. D. M. S. f. Zahnheilk. 1931, H. 20. 13) Higaki, R., Epithelnester in ausgeheilten Extraktionslücken. Kokubogakkai-Zasshi. 1932, No. 4. 14) Higaki, R., Besondere Befunde von Epithelnestern ausserhalb des Periodontiums. D. M. S. f. Zahnheilk. 1932, Heft. 8.

附 圖 說 明

第一圖 40歳ノ男子。5| 及ビ 4| 間ノ齒槽中隔。W＝齒根。a＝第二圖ニ示ス。b＝第三及ビ第四圖ニ示ス。

第二圖 第一圖aノ部分ヲ約200倍ニ擴大セルモノ。K＝齒槽骨。NB＝神經纖維束。a＝正常「エピテルチステル」。b＝磚狀上皮細胞型ニ増殖セル「エピテルチステル」。

第三圖 第一圖bノ部分ヲ180倍ニ擴大セルモノ。増殖セル「エピテルチステル」ハ珐瑯原基ノ發生期ノ形態ヲ示ス。NB＝神經纖維束。a, b, c＝強度ニ増殖セル「エピテルチステル」。d, e, f＝弱度ニ増殖セル「エピテルチステル」。

第四圖 第一圖eノ部分ノ第三圖トハ異リタル平面ヲ示ス。増殖セル「エピテルチステル」ハ甚シキ増殖傾向ヲ示シ且ツ其ノ形態ハ「アダマンチノーム」ニ特種ノモノナリ。NB＝神經纖維束。a＝強度ニ増殖セル「エピテルチステル」。

第五圖 第一圖ニ示スト同ジ顎骨ノ5| 及ビ 4| 間ノ齒槽中隔。W＝齒槽。P＝齒根膜。a＝第六圖ニ示ス。

第一圖

第二圖

第三圖

第四圖

第五圖

第六圖

第七圖

第 八 圖

第 九 圖

第 十 一 圖

第 十 圖

第 十 二 圖

第 十 三 圖

第 十 四 圖

第 十 五 圖

第六圖 第五圖 a ノ部分ヲ 210 倍ニ擴大シタルモノ。a = 正常「エピテル子ステル」ノ性質ヲ有スル上皮細胞。b = 立方形ニシテ圓筒形ニ近キ形態ヲ有スル細胞層。c = 正常「エピテル子ステル」。NB = 神經纖維束。

第七圖 第一圖ト同シ顎骨ニシテ 5 及ビ 6 間ノ齒槽中隔。W = 齒根。a = 第八圖ニ示ス。P = 齒根膜。

第八圖 第七圖 a 部ヲ 210 倍ニ擴大セルモノ。NB = 神經纖維束。a = 増殖セル「エピテル子ステル」。b = 車軸狀區分ヲ有スル部分。

第九圖 第一圖ト同シ顎骨ノ 2 ノ血管神經管ヲ示ス。W = 齒根端。P = 齒根膜。a = 第十圖ニ示ス。

第十圖 第九圖 a 部ヲ 210 倍ニ擴大シタルモノ。a = 増殖セル「エピテル子ステル」。NB = 神經纖維束。

第十一圖 第一圖ト同シ顎骨 1 ノ血管神經管ヲ示ス。NG = 齒根側。a, b = 「エピテル子ステル」。c = 第十二圖ニ示ス。

第十二圖 第十一圖 c ヲ 210 倍ニ擴大セルモノ。a = 増殖セル「エピテル子ステル」。NB = 神經纖維束。

第十三圖 49 歳ノ男子。4 ノ血管神經管ヲ示ス。W = 齒根端。G = 血管。EN = 「エピテル子ステル」。a = 第十四及ビ第十五圖ニ示ス。

第十四圖 第十三圖 a ヲ弱擴大セルモノ。a = 増殖セル「エピテル子ステル」。NB = 神經纖維束。

第十五圖 第十三圖 a 部ヲ 500 倍ニ擴大セルモノ。珥瑯上皮腫ニ甚ダ似タル像ヲ示ス。周邊ニハ圓筒形細胞、中心ニハ星芒狀網ヲ作り且ツ囊腫變性ニ陥レリ。a = 圓筒細胞。b = 星芒狀網。